

優秀賞論文要旨

ジェンダーステレオタイプに疑問を持つ人を育てるには —大学生のジェンダー意識の現状をふまえて—

東 千 穂

世界の男女格差が改善される傾向にある中、日本の男女格差の解消は遅々として進まず、2019年12月に世界経済フォーラムが発表した「男女格差報告書」では、日本の順位は過去最低となる121位であった（朝日新聞，2019）。政治分野で女性の政治家や閣僚が極めて少ないことが順位を下げる最大の要因であったが、政治分野に限らず、さまざまな分野で、今もなお女性の地位は低い。

男女格差が改善されない主な原因の一つが、根強いジェンダーステレオタイプの存在である。家事は女性がすべきである（向いている）とか、理系科目は男性の方が女性よりも能力が高いなどといった性差にかかわるステレオタイプが蔓延している。このようなステレオタイプは、時代とともに解消されつつある部分もあるが、さまざまな認知的な能力や適性における性差の存在を確信している人はいまだ多い。また、女性は化粧をすべきとか、ヒールの高い靴を履く方がよいといった考えを持つ人も多く、女性に不利益な服装規定もある（山下・矢野，2020）。このような日本社会で育つと、それを当然のこととして受け入れてしまい、現状に疑問をもつことは容易ではないが、一方で、このようなステレオタイプに疑問をもち、ジェンダー平等な社会の実現を求める人々もいる。

本研究の目的は、ジェンダーステレオタイプを解消し、ジェンダー平等な社会を実現するために、ステレオタイプに疑問を抱くことができる人、平等主義的ジェンダー観を持つ人が育つための要因を探ることであった。そのために、

まず質問紙調査を実施し、伊藤（1997）の性差観スケールを用いて人々のジェンダー観を測定するとともに、親のジェンダーステレオタイプの態度などを調査した（研究1）。

調査対象者は女子大学生であり、98名（ 19.6 ± 1.0 歳）から有効回答を得た。性差観得点の結果は、平均値が 67.9 ± 14.2 点の正規分布を示した。性差観得点の範囲は30～120点であり、点数が低いほど男女平等主義的であることを示す。1995年に行われた調査の20代女性の平均が 69.4 ± 13.9 点であったことをふまえると（伊藤，2000）、それから20年以上経た今も若年女性の性差観が大きく変わっていない可能性が示唆される。また、ジェンダーステレオタイプが強い（性差観得点が高い）人ほど、その母親もジェンダーステレオタイプの態度を示すという相関がみられた。

次に、研究1の参加者のうち、性差観得点が低い人を中心に、比較対象として中程度の得点の人と高得点の人にも、インタビュー調査への参加を依頼した（研究2）。その結果、28名が調査に参加し、うち低得点の人が11名、中程度の得点の人が10名、高得点の人が7名であった。インタビューでは、質問紙調査（研究1）の回答を振り返りながら、そのように回答した理由や背景、および家庭や学校等で受けてきた教育経験や環境について詳細に尋ねた。

インタビュー調査の結果、まず、ジェンダーステレオタイプの強さを測る際に、質問紙を用いることの限界が示された。性差観の質問項目の中には、たとえば「人前では、妻は夫を立てた方がよい」といった項目があり、これに対して「そう思う」と回答した人は、「そう思わない」と回答した人よりも得点が高くなるが、「そう思う」と回答した人の中に、妻だけでなく夫も配偶者を立てるべきといった平等主義的の態度を有する人もいることがわかり、回答の意図を正確に知るうえでインタビュー調査の意義が見出された。また、教育経験や環境についてのインタビュー結果からは、家庭で中庸なステレオタイプの教育を受けた人よりも、男女平等主義的な家庭や、逆に極端なジェンダーステレオタイプに曝されて育った人は、社会の現状やステレオタイプに疑問を持つよう

になり、平等主義的な態度を示すことが示唆された。中庸なステレオタイプの家庭で育った人にも、ステレオタイプに疑問を持つきっかけを与える場として、学校教育の役割が期待される。